

札幌市文化財調査報告書 XXXIX

K 1 3 5 遺 跡

西 5 丁目通地点

1 9 9 0

札幌市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、昭和63年8月17日から9月26日まで札幌市北区北6条西5丁目の西5丁目樽川通の道路改良工事に関連して発掘調査を実施したK135遺跡西5丁目通地点の調査報告書である。
- 2 発掘調査の現場の作業は、札幌市教育委員会社会教育部文化課文化財保護係(現在市民局生活文化部文化財課埋蔵文化財係)の上野秀一・羽賀憲二が実施し、整理および本書の編集・執筆作業は上野秀一が担当している。
- 3 石器の石質の肉眼鑑定は、北海道開拓記念館の赤松守雄氏にお願いした。
- 4 発掘調査・整理において、下記の方々より助言と協力を賜わった(順不同、敬称略)。

　　北海道教育庁文化課

　　北海道埋蔵文化財センター

　　札幌市文化財保護審議会委員 大場利夫

　　北海道大学文学部

　　北海道大学埋蔵文化財調査室

　　北海道開拓記念館

- 5 発掘調査・整理作業には、下記の人々が従事した。

　　小竹昌子、山本泰子、田村リラコ、今田瑞恵、平野井司、佐藤真樹、佐藤陽子、中川由美、堀田和美、渡辺千草、関 丈博、倉橋直孝、伊場昭代ほか

- 6 発掘・整理作業、報告書出版については、札幌市建設局鉄道高架部(当時)、土木部特定街路課鉄道高架係(現在)、株式会社たいよう、北海道旅客鉄道株式会社、佐藤工業株式会社札幌支店札幌高架作業所等に御協力と御理解を賜わったことを記し、感謝の意を表する次第である。

- 7 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「札幌」を利用した。

目 次

第1章 発掘調査までの経過	7
第2章 発掘調査の方法と層序	10
第1節 発掘調査の方法	10
第2節 層序	10
第3節 遺跡地の地形変遷について	18
第3章 遺構	20
第1節 炭層	20
第2節 溝状遺構	23
第3節 杭遺構	24
第4章 遺物	27
第1節 土器	27
第2節 石器	29
結語	34

挿図目次

第1図	K135遺跡付近地形図(○印K135遺跡).....	8
第2図	K135遺跡付近地形図(1:2,500).....	9
第3図	K135遺跡西5丁目通地点遺構配置図および実測図(1:125).....	11
第4図	K135遺跡西5丁目通地点セクション図(1)(A-B、C-Dセクション).....	13
第5図	K135遺跡西5丁目通地点セクション図(2)(E-Fセクション).....	15
第6図	K135遺跡西5丁目通地点炭層実測図.....	20
第7図	K135遺跡溝状遺構実測図.....	21
第8図	K135遺跡西5丁目通地点杭遺構実測図.....	24
第9図	K135遺跡西5丁目通地点発掘区出土土器拓影図.....	28
第10図	K135遺跡西5丁目通地点発掘区出土土器実測図.....	29
第11図	K135遺跡西5丁目通地点発掘区出土石器実測図(1).....	29
第12図	K135遺跡西5丁目通地点発掘区出土石器実測図(2).....	30

表目次

第1表	K135遺跡西5丁目通地点炭層一覧表.....	26
第2表	K135遺跡西5丁目通地点出土杭一覧表(A-2区).....	26
第3表	K135遺跡西5丁目通地点出土土器一覧表.....	32
第4表	K135遺跡西5丁目通地点出土石器一覧表.....	33

図版目次

図版1 a	発掘区全景(1)(I E期:北より).....	37
1 b	発掘区全景(2)(I E期A~C-1、2区:北より).....	37
図版2 a	発掘区全景(3)(II L期A、B-1、2区:西より).....	38
2 b	発掘区全景(4)(I E期A、B-1、2区:西より).....	38
図版3 a	発掘区全景(5)(発掘着手面、A~C-2、3区:北より).....	39
3 b	発掘区セクション(1)(A-Bセクション、B-1区、西より).....	39
図版4 a	発掘区セクション(2)(B-1、2区、北より).....	40
4 b	発掘区セクション(3)(C-Dセクション、C-2区、南西より).....	40
図版5 a	炭層A(A-2区XIX c'層上部、西より).....	41
5 b	炭層D(A-2区XIX c'層中部、西より).....	41

図版 6 a	炭層 C (A-2区 XIX c'層中部、西より)	42
6 b	溝関係セクション (A-1区、E-Fセクション、東より)	42
図版 7 a	溝近景(1) (A-1、2区、発掘前、西より)	43
7 b	溝近景(2) (A-1、2区、発掘後、西より)	43
図版 8 a	溝近景(3) (B-2、3区、西より)	44
8 b	溝近景(4) (A-1区、東より)	44
図版 9 a	杭遺構近景(1) (A-2区、西より)	45
9 b	杭遺構近景(2) (A-2区、溝発掘後、西より)	45
図版10 a	杭列(1) (北側、南西より)	46
10 b	杭列(2) (南側、西より)	46
図版11 a	遺物出土状況(1) (C-1区、B-1層群7層、P1、北より)	47
11 b	遺物出土状況(2) (B-2区、A層群XVIII c層、S4、5、P2、西より)	47
図版12 a	遺物出土状況(3) (A-2区、A層群XVIII c層、F7、8、東より)	48
12 b	遺物出土状況(4) (A-2区、A層群XVIII c層、P8、真上より)	48
図版13 a	遺物出土状況(5) (A-2区、A層群XIV層、P6、9、南西より)	49
13 b	遺物出土状況(6) (A-2区、A層群XIV層、P9、南西より)	49
図版14 a	遺物出土状況(7) (A-2区、A層群IX層、P3、東より)	50
14 b	遺物出土状況(8) (A-2区、A層群Va層、P1、東より)	50
図版15 a	発掘区出土土器(1)	51
15 b	発掘区出土土器(2)	51
図版16 a	発掘区出土石器	52
16 b	発掘調査風景(1)	52
図版17 a	発掘調査風景(2)	53
17 b	発掘調査風景(3)	53

第1章 発掘調査までの経過

今回の発掘調査は、JR 北海道函館本線高架化工事に関連して西5丁目樽川通の道路改良工事に伴い実施したものである。

今工事は、北区から都市部に通じる幹線である西5丁目樽川通の北8条通から北4条通にかけての路盤を切り下げ整備する工事で、もうひとつの幹線である国道5号線の創成川通と併行して実施され、札幌駅付近の交通体系に相当の混乱が生じるものであった。工事区内のなかで北6条付近については、昭和59、60年に高架化工事の一次施行に伴い発掘調査を行なった K135遺跡の4丁目地点と5丁目地点（札幌市教育委員会1987）の間に位置し、本道路部分にも埋蔵文化財包蔵地が広がっていると考えられたため、昭和61年5月からその取り扱いについて、原因者である札幌市建設局鉄道高架部（当時）と本格的な協議をすることとなった。

前回の調査結果から、本地点には4、5丁目地点の調査で検出された中・近世頃に掘られた溝が存在し、また古い時期の包含層については西5丁目側にはそれが広がる可能性は少ないが、西4丁目側については溝の北側に包含層が一部伸びている可能性は高いと判断されることから埋蔵文化財の調査対象区域については、北7条通から北6条付近までとし、発掘調査地区の確定のための確認調査の方法・時期について協議した。しかし、原因者側からは本地点には昭和7年に敷設した立体交叉の橋脚があり、橋脚を撤去しないと確認調査ができないこと、工事予定では迂回路の関係で北側（北7条通から北6条）を一期工事として橋脚撤去を昭和63年4月に着手し、南側（北6条から北5条通）は二期工事として高架化工事の一次開業（昭和63年11月）後に行ない、国体がはじまる平成元年9月上旬までには全面開通する必要があることなどの説明があった。

これをうけて、本市文化課（当時）としては、本線が本市にとってきわめて重要な幹線道路で現状保存が困難であり、また橋脚撤去後に確認調査を実施し発掘調査の是非・範囲を決定し、予算を含めた調整をはかることが日程的に難かしいことから、前回の発掘調査の結果および橋脚の基礎および既設の埋設管によって包含層が部分的に破壊されていることなどを考慮し、発掘調査地区を溝部分とその北側の一部の約400m²として、橋脚撤去後確認調査を実施しないで直ちに発掘調査に着手することとなった。

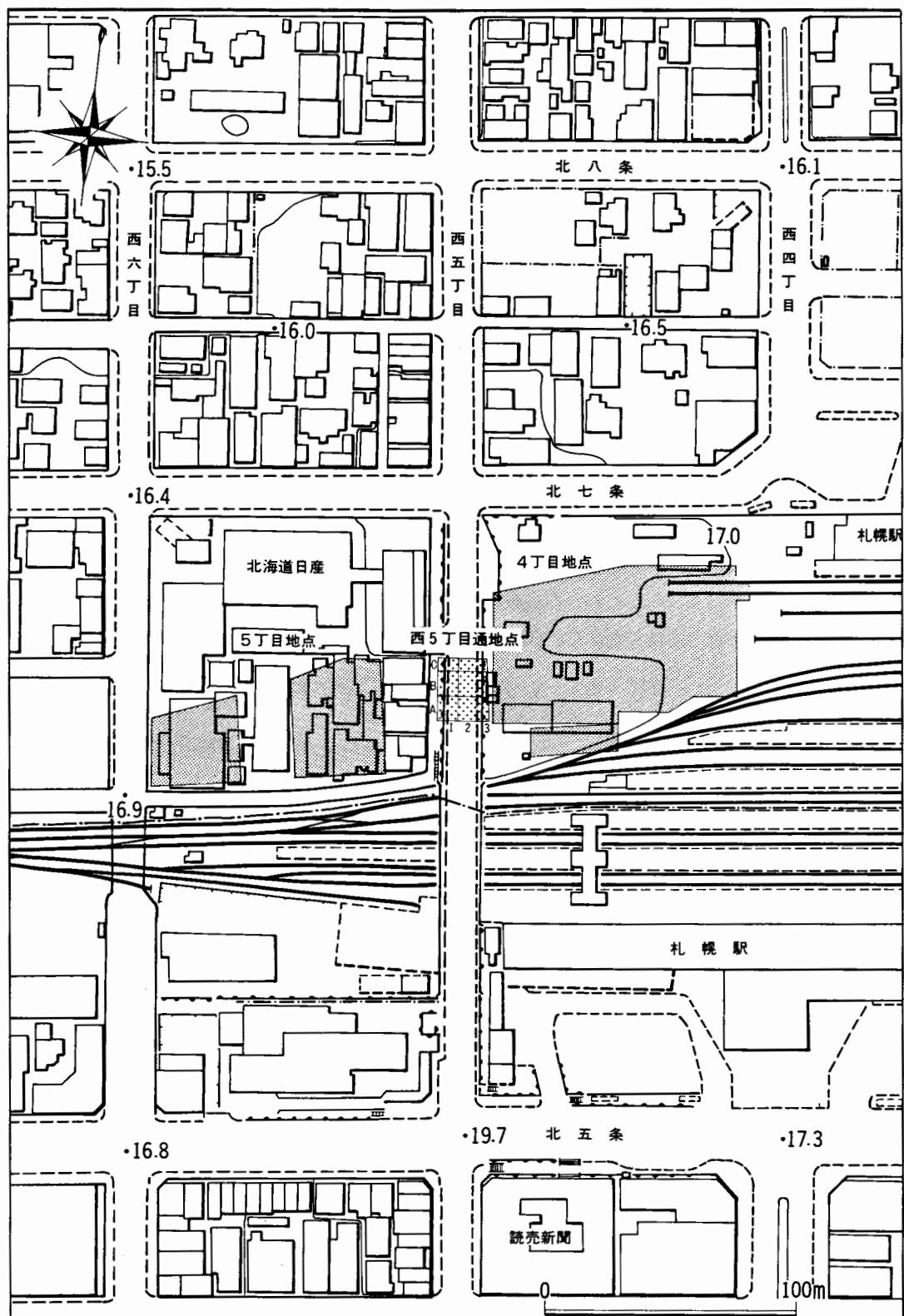
なお、北側部分の北7条通側とその隣接の南側の北6条付近から北5条通（手稻通）については、工事立会調査を実施している。

[引用文献]

札幌市教育委員会 1987 『K135遺跡4丁目地点、5丁目地点』 札幌市文化財調査報告書 X X X



第1図 K 135遺跡付近地形図(○印K 135遺跡)



第2図 K 135遺跡付近地形図(1:2,500)

第2章 発掘調査の方法と層序

第1節 発掘調査の方法 (第1~3図、図版1a~3a)

今回の調査地点は、西5丁目樽川通の北6条から北7条にかけての部分で、前回調査した4丁目地点のB-4~7区の西側に位置する。グリットは、10×10mの大グリット方式をとったが、基線は独自に道路工事のセンターラインとした。名称は、南北方向がアルファベット(A~C列)、東西方向は算用数字(1~3列)である。調査面積は、南北は25m、東西は20m(道路幅)の約500m²を対象面積としたが、橋脚の基礎や埋設管などの大きな搅乱が存在し、実質的な調査面積は約400m²である。

調査方法は、平面発掘と併行して、堆積層の状況を把握するため1列の東側(基線)と2列の東よりの南北に走る搅乱にそって南北方向の2本のトレンチ(A-B、C-Dセクション:第4図)をあけている。また、後述する溝部分については隨時セクションライン(E-F、G-H、I-Jセクション:第5、8図)を設け、記録をとりながら調査を進めた。発掘調査の深さは、前回調査の4丁目地点のB列部分の最終包含層である29層の深さ(標高14.2m)を基準にしたが、溝が掘られた下部の旧河川の状況を調べるために、今回は全体に礫層上面まで剝土し、部分的には標高13.6~14mまで下げている。

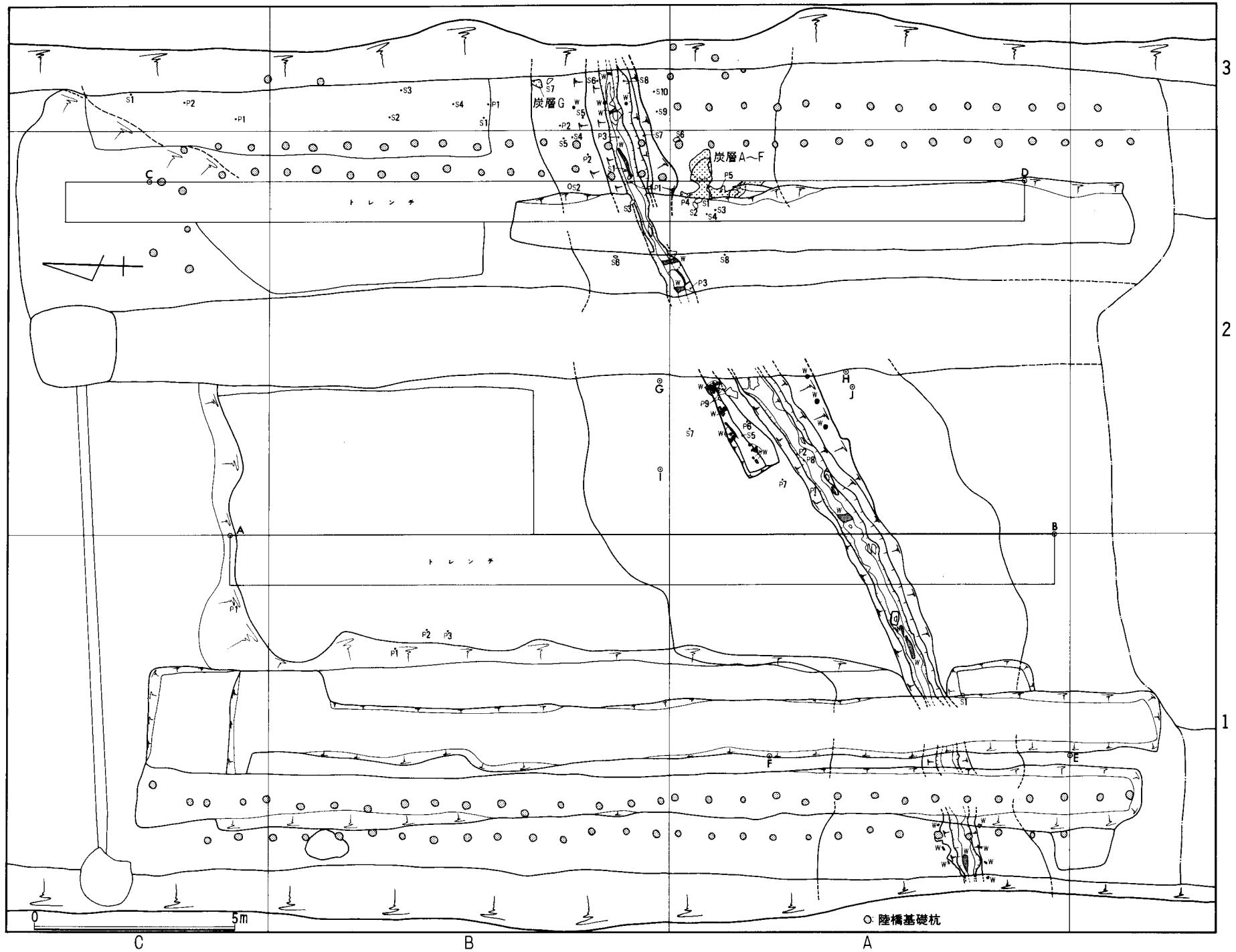
第2節 層序 (第4、5、8図、図版3b~4b、6b)

今次調査地点は、前回調査した4丁目地点の「崩落層」と仮称した堆積層の続きと小さな河川に堆積した層からなり、きわめて複雑な状況であるため第4、5図等に示したように大きくA~Eの5つの層群にわけて記述した。この中で、A層群は最上部に堆積するいずれもシルト系の土層からなる層群で、溝を掘り込んでいる層と溝を覆う層からなる。B層群は、地区によってB-1からB-5まで細分しているが、いずれもA層群の下部に存在し、本地区の基盤をなすE層群の上面の傾斜に合わせて堆積したもので、シルト系の土層と砂質系の土層(細粒砂中心)からなる。C層群は、B層群とE層群の間に堆積するもので、細~粗粒砂層を中心とする。D層群は、第3図のC-2、3区部分に破線で示した位置から北西側に堆積するもので、河川等の侵食の後再堆積した細~粗粒砂層を中心とした土層(所謂「崩落層」)である。E層群は、本地区の基盤をなす堆積層で、中~粗粒砂および砂礫層からなる。

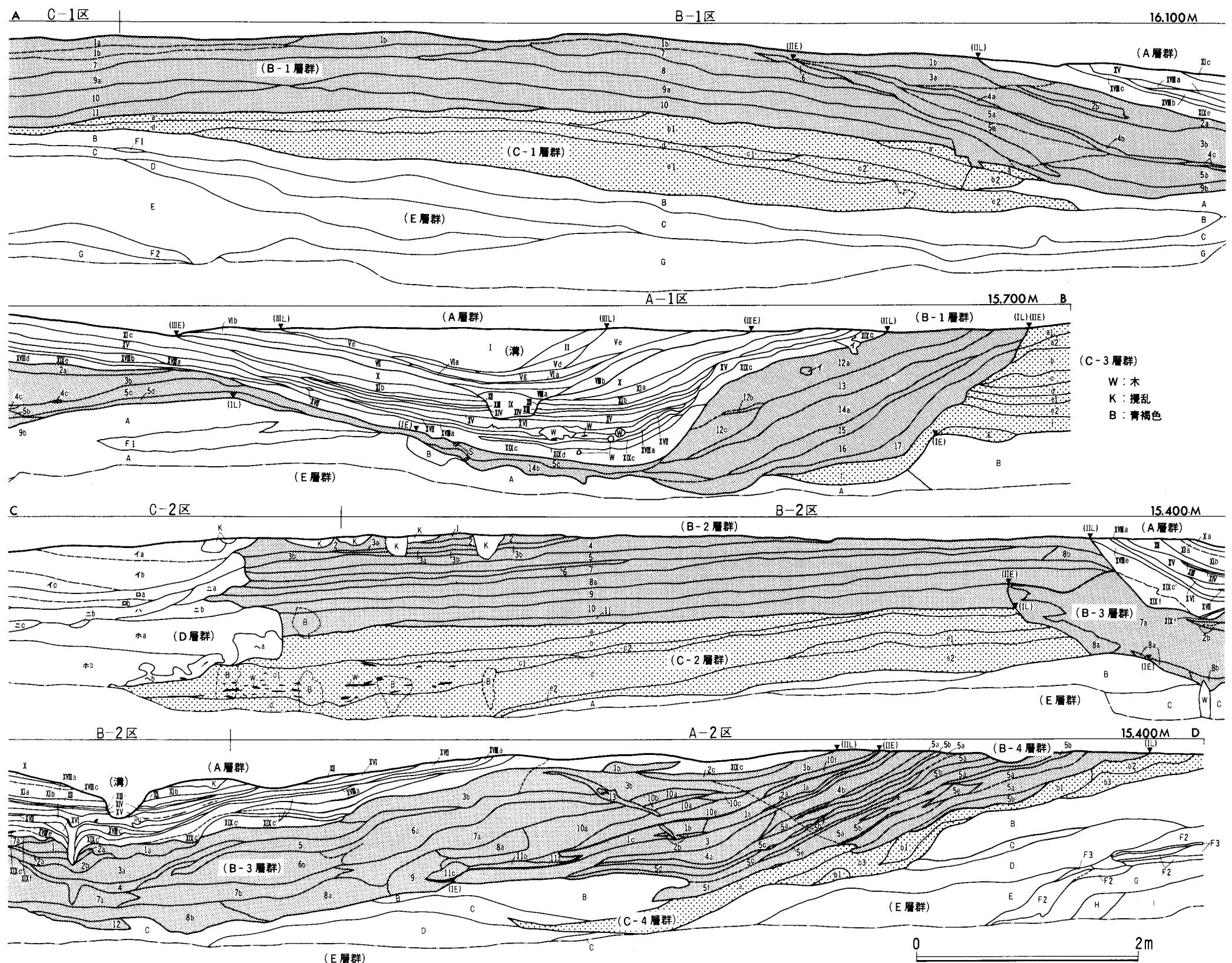
各層群の層名を列記すると以下のとおりである。

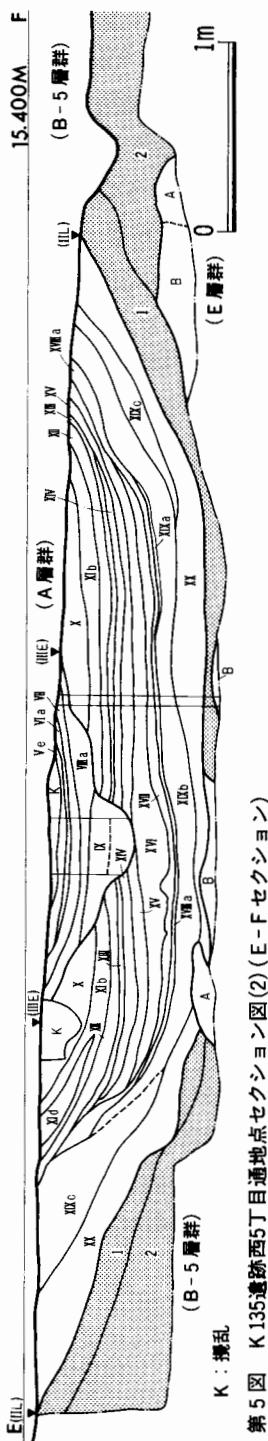
A層群

I : 淡黒褐色土層(I、II層は最も新しい埋土で、パッチ状に数多くの暗灰色と灰褐色のシルト土粒入る)。II : 淡黒褐色土層(同上のものがI層より若干少ないが入る)。III a : 黒褐~淡(灰)黒褐色土層(III a~IV b層は、I、II層より若干古い時期の埋土で、灰褐色シルトがブロック状ないし一部均一に入っている)。III b : 黒褐色土層(暗灰色シルトの土粒点々と入り、流木が混る)。IV a : 淡黒褐



第3図 K 135遺跡西5丁目通地点遺構配置図および実測図(1:125)





第5図 K135 邊跡西5丁目通地点セクション図(2)(E-Fセクション)

色土層(中に灰褐色土粒点々と入る)。IV b : (暗)灰色シルト層。V a : 黒褐色土層(I、II層中に含むシルトの細粒点在。汚染層?)。V b : 淡黒色土層。V c : 灰黒褐色土層(VI a層の火山灰粒を所々ブロック状ないし縞状に含む)。V d : 暗黒褐色土層(所々火山灰粒入る)。V e : 黒色土層(一部火山灰粒入る)。VI b層とは明瞭な層界がある)。V f : 暗灰色土層(シルト質土粒を均一に含む)。V g : 黒～黒褐色土層(横縞状に不規則に色調変化。火山灰粒含む)。VI a : 灰色火山灰層(Ta-aと考えられる)。VI b : 黒褐色土層(VI a層の火山灰粒多く含む)。VII : 黒褐色土層。VIII a : 灰黒褐色土層(暗灰色シルト均一に含む)。VIII b : 明灰黒褐色土層(不均一に灰褐色シルトの土粒入る)。IX : 暗灰(褐)～灰黒褐色土層(ブロック状に灰色シルト土粒と草の根多く入る)。X a : 灰(褐)色シルト層。X b : 灰褐色シルト層(やや青味ある)。XI a : 黑褐色土層(薄い暗灰色シルト層入る)。XI b : 黑色土層(真黒。上部に灰色シルト層薄く入る)。XI c : 明黒褐色土層。XI d : 暗灰褐色シルト層(XI b層の間層)。XII : (暗)灰色シルト層(下部に黒色土層の薄層1本入る)。XIII : 明(灰)黒褐色土層(暗灰色シルト層中に黒色土粒入る)。XIV : 灰色シルト層。XV : 暗茶褐色土層(木の根を多く含む泥炭層で、上端部に黒色土層の薄層入る)。XVI : 茶褐色土層(XV層と同じ)。XVII : 灰色シルト層。XVIII a : 暗黒褐色土層。XVIII b : 青褐色シルト層(間層)。XVIII c : 暗灰色シルト層(炭粒点在)。XVIII d : 明茶褐色土層。XVIII e : 黑褐色土層。XIX a : 灰色シルト層。XIX b : 暗灰色シルト層(炭粒点在)。XIX c : (暗)灰色シルト層(炭粒点在)。XIX c' : (暗)青褐色シルト層(C-DセクションのA-2区北側部分では、炭粒を含む薄層が3枚入る)。XIX d : 灰色シルト層(XIX c層内の間層)。XIX e : 青褐色シルト質土層。XIX f : 暗青褐色シルト層(泥炭均一に含む)。XX : (青)灰色シルト層。

B層群

B-1層群

1a : 灰褐色砂質土層(やや堅くしまる)。1b : 灰褐色シルト質土層(堅くしまる)。2a : 青褐色砂質土層(中に灰色シルトの土粒均質に含む)。2b : 灰褐色シルト質土層(砂質的)。3a : 明灰褐色砂質土層。3b : 暗青褐色シルト層。4a : 灰褐色細粒砂層。4b : 茶褐色中粒砂層。4c : 灰色中粒砂層(下部は褐色粗粒砂層)。5a : 明灰褐色シルト質土層(砂質的)。5b : 灰色シルト質土層。5c : 青褐色砂質土層。5d : 青褐色細粒砂層。

6：暗灰褐色シルト質土層(砂質的)。7：明灰褐色シルト質土層(砂質的)。8：灰褐色シルト質土層(細粒砂層の薄層が層間にやや幅広く入る)。9a：灰褐色シルト層。9b：灰色シルト層。10：灰褐色シルト質土層(ラミナ状に細粒砂層入る)。11：暗灰褐色シルト層(中にラミナ状に細粒砂の薄層入る)。12a：青褐色シルト層。12b：青褐色シルト層(炭粒を多く含む)。12aと12cの層界に堆積)。12c：青褐色シルト層。13：青褐色砂質土層(シルト質土と細粒砂からなる)。14a：青褐色シルト質土層(若干砂を含む)。14b：青褐色シルト層(泥炭を含む層で、粘性が強い)。15：青褐色細粒砂層。16：青褐色シルト層。17：青褐色砂質土層(シルト質土～細粒砂層からなる)。

B-2層群

1：暗灰(茶)褐色細～中粒砂層。2：暗灰褐色シルト質土層。3a：暗灰(茶)褐色細～中粒砂層。3b：暗灰褐色細粒砂～シルト質土層。4：暗灰褐色シルト質土層(一部細粒砂の薄層入る)。5：灰褐色シルト層(粘性強い)。6：4層と同じ。7：白灰褐色シルト層。8a：4層と同じ。8b：暗灰褐色砂質土層。9：灰褐色シルト層(粘性強い)。10：灰褐色シルト層(細粒砂の薄層ラミナ状に入る)。11：灰褐色細粒砂～シルト質土層。

B-3層群

1a：青褐色(細～粗粒)砂層。1b：灰褐～褐色中粒砂層。2a：青褐色砂質土層(泥炭均質に含む)。2b：青褐色(細～中粒)砂層。2c：暗灰褐色細粒砂層。3a：暗青褐色シルト層(全体に泥炭均一に含み、数枚の細粒砂の薄層入る)。3b：灰褐色シルト層(若干泥炭含む)。4：茶褐色泥炭層。5：青褐色シルト層(中央に細～中粒砂入り、泥炭も若干含む)。6a：灰褐色細粒砂層。6b：青褐色細粒砂層(パミス・泥炭粒入る)。7a：青褐色シルト層(中に青褐色細粒砂の薄層何枚か入る)。7b：青褐色シルト層(中に同色の中～粗粒砂多く含む)。8a：灰色シルトと褐色細粒砂のマーブル状の混合層。8b：青褐色シルト層。9：灰褐～茶褐色中～粗粒砂層。10a：灰褐色細粒砂層。10b：灰白色シルト層。10c：灰褐色中粒砂層。10d：灰色細粒砂層。10e：灰褐色中粒砂層。10f：暗灰褐色シルト質土層(中に暗灰褐色細～中粒砂を含む)。11a：褐色粗粒砂。11b：灰褐色細～中粒砂層。11c：褐色粗粒砂。12：青褐色細粒砂層。13：灰褐～褐色細粒砂層(地震による地割れの噴上げ)。

B-4層群

1a：(暗)灰褐色シルト層。1b：灰色シルト層。1c：灰白色シルト層。2a：暗灰褐色細粒砂層(中にシルト質土所々含む)。2b：暗灰褐色シルト質土層(暗灰褐色細～中粒砂を含む)。3：灰色シルト層。4a：暗灰褐色シルト質土層(暗灰褐色細～中粒砂を含む)。4b：暗灰褐色細粒砂層(中にシルト質土所々含む)。5a：1a層と同じ。5b：2b層と同じ。5c：1c層と同じ。5d：茶褐～褐色粗粒砂層。5e：4b層と同じ。5f：1b層と同じ。

B-5層群

1：(青)灰色砂質土層(細粒砂)。2：(青)灰色砂質土層(1層より粘性ある)。

C層群

C-1層群

a：暗灰褐色粗粒砂層。b1：暗灰褐色細粒砂～シルト質土層(中にラミナ状に中粒砂入る)。b2：灰褐色細粒砂層。c1：暗灰茶褐色粗粒砂層。c2：暗灰褐色細～中粒砂層。e1：暗灰褐～暗灰色中粒砂層(所々細礫とシルト小塊が入る)。e2：灰褐色中粒砂層。d：暗灰褐色細粒砂層。

C-2層群

a：灰褐～褐色細粒砂層。b：灰褐色細粒砂層。c1：(明)灰褐色シルト質～細粒砂層。c2：灰色シルト質～細粒砂層。d：(明)灰褐色細粒砂層。e1：褐色中粒砂層。e2：灰褐～褐色中粒砂層(リモナイト多い)。

C-3層群

a1：褐色シルト層。a2：褐色シルト質土層。b：褐色細粒砂層。c：茶褐色中粒砂層。d：灰褐色細粒砂層。e1：灰褐色シルト質土層。e2：灰色シルト層。f：灰～褐色細～中粒砂層(部分的に灰色シルト含む)。g：白色シルト層。

C-4層群

a：暗灰色細粒砂層(中に泥炭がラミナ状に多く入る)。b1：暗灰(茶褐)色中粒砂層。b2：黒褐色中粒砂層。b3：褐色細粒砂層。

D層群

イ a：暗灰褐～暗灰茶褐色細粒砂層(互層)。イ b：暗灰(茶)褐色細～中粒砂層(ラミナ状に中粒砂と細粒砂の薄層入る)。イ c：暗灰茶褐色細粒砂層。ロ a：暗灰(茶)褐色中～粗粒砂層。ロ b：暗灰(茶)褐色粗粒砂層。ハ：暗灰褐色細～中粒砂層。ニ a：暗灰褐色シルト質～細粒砂層。ニ b：灰褐色シルト層。ニ c：灰褐色シルト質～細粒砂層。ホ a：褐色中～粗粒砂層(リモナイト沈殿)。ホ b：褐～灰褐色中粒砂層(ラミナ状に所々灰色シルトの土粒入る)。ヘ a：灰褐色シルト層(崩落層)。ヘ b：灰色シルト層(崩落層)。炭化物と炭化材点在)。

E層群

A：暗褐色粗粒砂～細礫層(礫径2～8cm)。B：暗褐色粗粒砂層(一部灰・茶褐色細礫混る)。C：灰褐色砂礫層(礫径2～7cm。一部暗灰、茶褐色)。D：灰褐色粗粒砂層(一部褐～茶褐色)。E：暗灰色砂礫層(一部褐～暗茶褐色)。F1：灰色シルト層。F2：(暗)灰褐色シルト質土層。F3：暗(灰)褐色中粒砂層。G：暗灰色粗粒砂層(一部暗褐～茶褐色。リモナイト多く沈殿し、所々細礫混じりの暗灰色砂礫層入る)。H：灰褐色シルト質土層(やや粘性強い)。I：灰褐色中粒砂層。

なお、C-DセクションのB-2区の溝左側で認められたA層群のXVI～XIXc'層、B-3層群の4層などの落ち込みは、陸橋の橋脚の基礎杭が打ち込まれたことによるものである。

第3節 遺跡地の地形変遷について (第4、5、8図、図版1a～2b)

以上の層内容と第4、5図等に示したセクション図の堆積状況から判断して、本地点付近にはかつて小さな河川が流れていたことが伺える。しかも、この河川は侵食・埋積を繰り返し、時間とともに形状は著しく変化しているが、その変遷過程を推測すると以下のようになる。なお、第4、5、8図には各時期の沢ないし凹みの肩の部分に三角のマークと時期番号を表示した。

I期：本期は、中～粗粒砂および砂礫層からなるE層群上面の時期(前半期：I E期)と細～粗粒砂を中心としたC層群の上面の時期(後半期：I L期)とに分けられる。

前半期は、A-BセクションでみるとA-1区部分に上幅約4.7mの浅い凹みがある。立上がりは、北側はなだらかであるが、南側はやや急である。この中にさらに河川流によって侵食されたと考えられる浅く狭い凹みが2箇所(上幅北側1m、南側1.5m、底面の標高はともに約14m)認められる。C-Dセクションにおいても、A-2区北側からB-2区南側にかけてともになだらかな肩をもつ上幅約4.7mの浅い凹みが認められ、なかにやはり2箇所小さな凹み(上幅北側0.9m、南側1.2m、底面の標高はともに約13.7m)がある。なお、A-2区南側では緩い傾斜で次第に高さを増し、確認できた限りでは標高約15.1mを数える。本期の凹みは、その後の侵食で形状が変化している可能性があるが、現在確認できる範囲でみると平面的には後述する人工的な溝とほぼ同一方向(東北東-西南西)に延びている。

後半期は、C層群が前半期の凹みの周辺にのみ堆積し、またE層群に一部嵌入する形で一体となって堆積しているところから、E層群が河川流によって侵食されて間もない時期に一気に堆積したものと考えられる。A-Bセクションでみると、北側(C-1層群)はB、C-1区部分でほぼ水平に厚く堆積しており、南側(C-3層群)はA-1区南側部分に崖状の急激な立上がりで堆積している。凹みの上幅は、約7mある。C-Dセクションでは、C層群は北側(C-2層群)ではやはりほぼ水平に厚く堆積し、B-2区北側では急激に立上がっている。最上部での標高は約14.6m。南側(C-4層群)は、A-2区部分でE層群の傾斜にそって薄く堆積している。凹みの上幅は約12m。この時期は、凹みは幅10m前後の沢状をなしていたものと考えられ、またA-Bセクションの北側の狭い凹みはこの時期に侵食されたものである可能性もある。堆積時期は、E層群の上部からC層群中にかけて後北C₂-D式土器が検出されるところから、二次堆積したことを考慮しても縄文後期初頭頃(4世紀)と考えられる。

II期：本期は、シルトと細粒砂系の土層からなるB層群が堆積した時期の面で、堆積土壌からみてI期に比べて川の流れは比較的静かであったと考えられる。細かくみると、C-DセクションのB-4層群に代表される層群が堆積した後の面(前半期：II E期)とB-1～3とB-5層群が堆積した後の面(後半期：II L期)とに分けられる。

前半期は、C-Dセクションでは南側はA-2区のB-4層群で、C-4層群にそって緩やかな傾斜でシルト系の土層がラミナ状に堆積している。北側は、層群として細分していないがB-2区のB-2層群の11層がこの時期の堆積層と考えられる。沢の上幅としては約10mある。A-Bセクション部分についても、細分はしていないがB-4層群に対応する層は、北側ではB、C-1区の5a～11層(B-1層群)、南

側は A-1 区の 16、17 層 (B-1 層群) で、ともに立上がりは緩い。沢の上幅は約 13m。

後半期は、A-B セクションでは、北側は 1a～4c 層が堆積した面で立上がりは緩く、南側は 12a～15 層が厚く堆積した面で立上がりはかなり強い。沢の上幅は約 10m。C-D セクションでは、北側は B-2、B-3 層群が堆積した面で立上がりは急激であり、南側は B-3 層群の堆積した面で 2 箇所小さな屈曲部があるが全体としてなだらかに立上がっており。沢の上幅は約 8.7m である。なお、上部が削平されているが E-F セクションでは沢の上幅は約 6.3m をはかる。本期の堆積時期も、後北 C₂-D 式土器が検出されているところから、続縄文後期初頭頃で I 期とあまり時間差がないものと考えられる。

III 期：この時期も、A 層群の X～XX 層が堆積した後の面（前半期：III E 期）と V a～IX 層が堆積した後の面（後半期：III L 期）とに分けられる。

前半期は、後述する溝が掘られた時期に相当し、灰色と黒色のシルト系土層が交互に堆積し、また前回の 4 丁目地点の花粉分析の結果でも当時の川は水の流れがほとんどなかったか、あったとしても僅かで、静水域での堆積が始まったといわれており、この段階では沢はほとんど埋没し浅い凹み程度になっていたものと考えられる。凹みの上幅は、A-B セクション部分では約 5.2m である。堆積時期は、XIV～XVIII c 層から擦文早期（北大 III 式）から擦文晚期までの土器がみつかっていることと溝が埋積して間もなく江戸時代中頃に降下した Ta-a の火山灰が堆積していることから 7～13 世紀から江戸時代前半頃までと考えられる。

後半期は、後述する橋杭と考えられる杭が打ち込まれた段階の面で、その時期は本層面直下から明治期の焼酎徳利が出土していることから明治期と考えられる。この段階では、ほとんど浅い凹み程度の状態で、その上幅は A-B セクションで約 2.9m、G-H セクションで約 2.7m である。

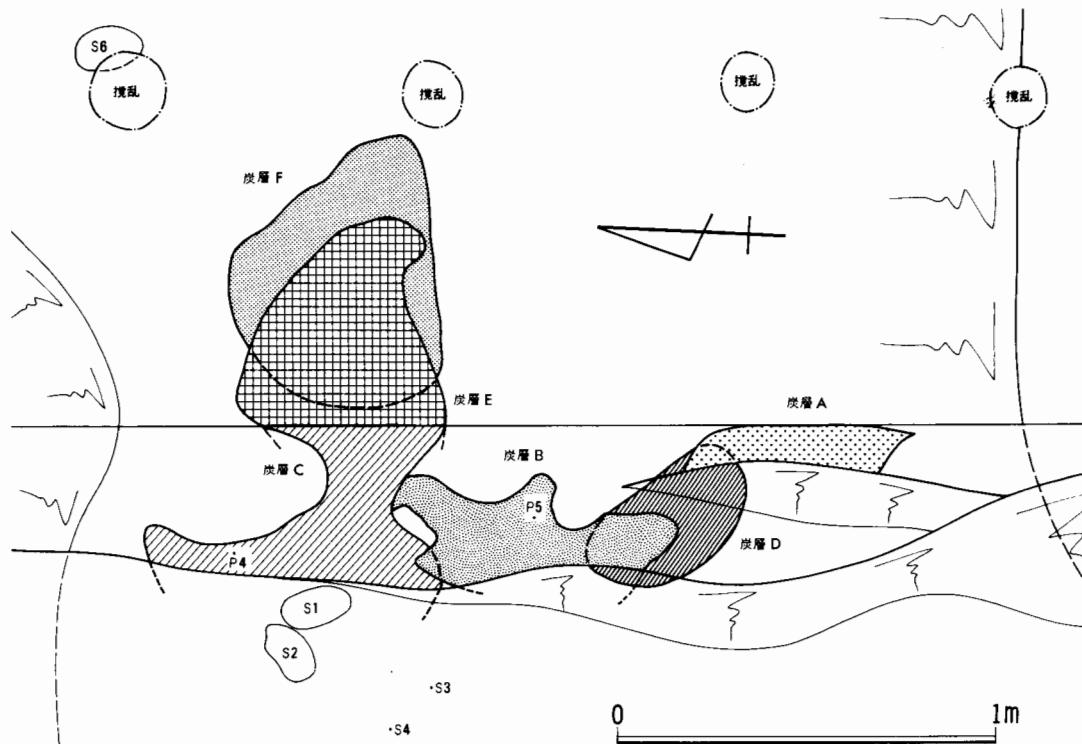
なお、I～IV b 層はすべて河川堆積物ではなく二次的な埋土であるが、I、II 層と III a～IV b 層では土質が明らかに異なっており、埋積された時期が若干ずれていたと考えられる。

第3章 遺構

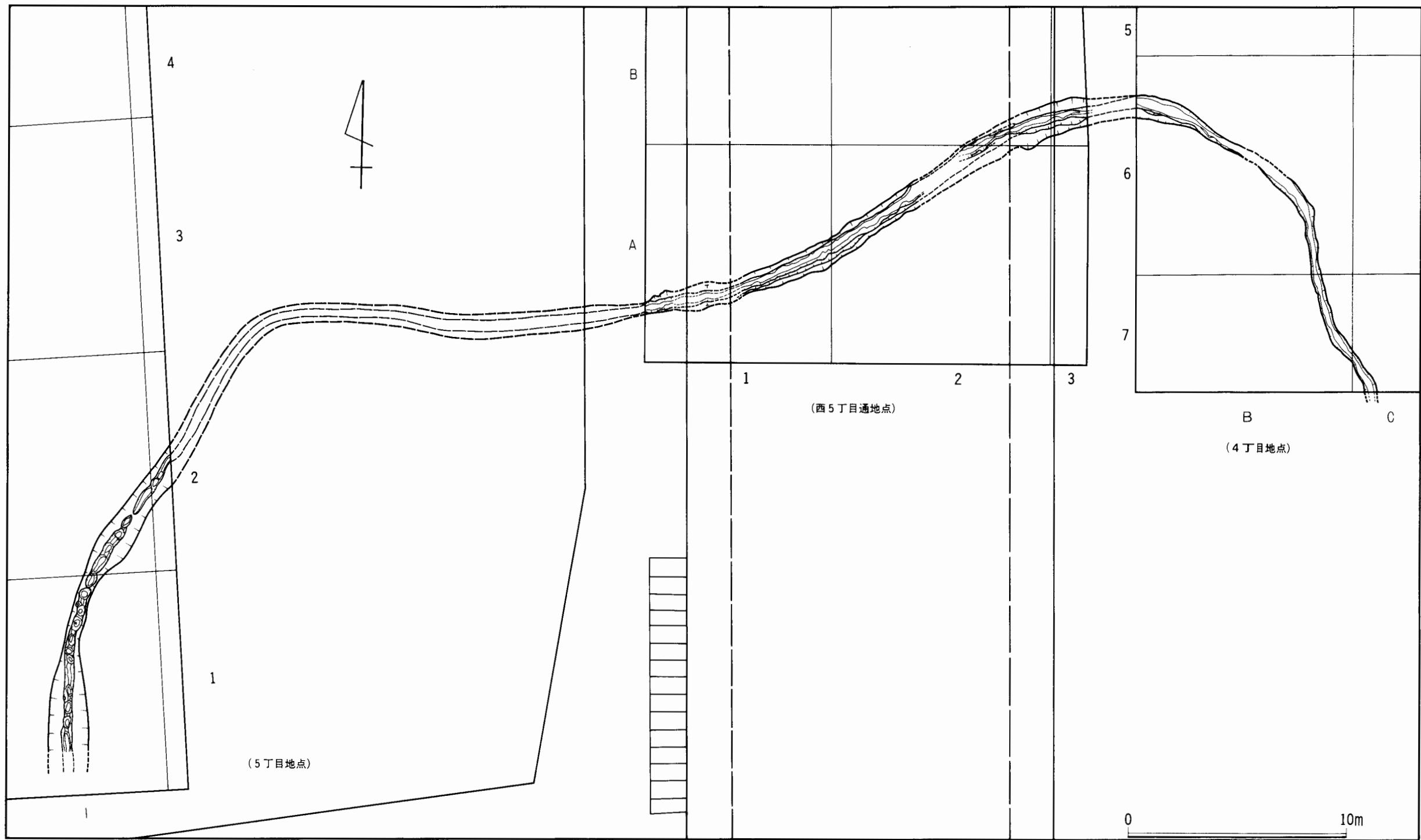
本地点からは、炭層6基と溝状遺構、杭遺構が各1基みつかっている。

第1節 炭層 (第3、6図、第1表、図版5a～6a)

炭層としたものは、炭粒が濃く分布する範囲を示したもので、A-2区北東隅で5箇所(炭層 A～F)、B-3区で1箇所(炭層 G)確認している。層位的には、いずれも第4図の C-D セクションの A-2区北側部分の XIX c'層(A層群)中である。本層には、太線の分層線で示した上中下の3枚の炭粒が多く含んだ薄層があり、この内上部の薄層からは炭層 A、B、E が、中部からは炭層 C、D が、下部からは炭層 F、G が確認されている。炭層内からは、人工遺物は検出されていないが、後述する3、4群とした土器が XIX c'層直上の XVIII c 層まで包含されており、また XIX c'層に併行する XIX c 層からは剝片石核(第11図1)、擦石(第12図6)が出土しているところから、これらの炭層は人為的に集積されたもので、その時期は擦文期頃までの所産である可能性が大きいと考えられる。



第6図 K 135遺跡西5丁目通地点炭層実測図



第7図 K135遺跡溝状構造実測図

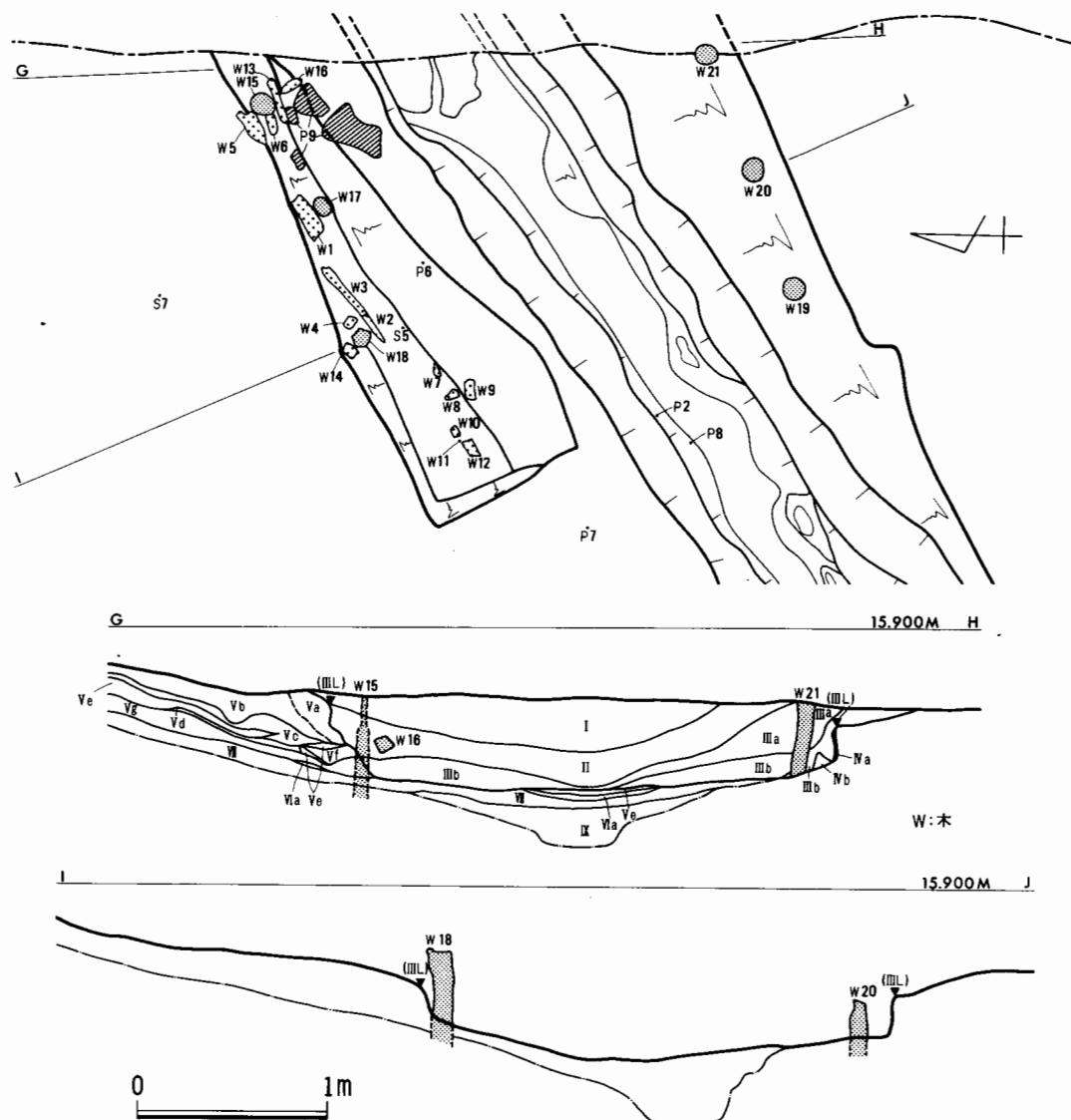
第2節 溝状遺構 (第3、7図、図版6b～8b)

溝状遺構については、前回の4丁目、5丁目の両地点の調査でその存在が確認され、両地点の間に位置する本地点にもその続きがみつかることが予想されていたものである。溝は、掘込面はX層上面で、第2章第3節でも触れたとおり地形面としてはIII期前半期に相当し、この時点ではかっての沢は浅い凹み程度になっていた。

溝は、西側はA-1区のやや南側から、東側はB-3区の南側まであり、全体は緩くカーブしながら東北東から西南西の方向に掘られている。III期前半期の凹みは、全体に緩い立上がりであるが、底面付近は約1m幅で一段低くやや平らな面があり、この中心部付近に溝が掘られたものである。溝の断面は、逆台形状をなし壁はきつく立ち上がり、大きさは上幅が37～54cm(平均約45cm)、底面幅が25～35cm(平均約30cm)、深さがセクション面では15～23cm(平均約19cm)である。底面は、一般的には平坦であるがやや丸味を帯びた所もあり、また一部深く掘られた部分もある。底面の高さは、局部的に深いところを除いて、東側部分では標高14.60～14.76m(平均14.68m)、中央部で14.62～14.78m(平均14.70m)、西側で14.77～14.83m(平均14.78m)で、東側から西側に向かってやや高くなる傾向がある。しかし、前回調査した4丁目地点では、本地点と隣接する西側部分が平均14.71m、その東側で平均14.59、14.65mであり、また5丁目地点の南側のセクション部分では約14.42mである。従って、5丁目地点部分はやや低いが、4丁目地点と本地点部分とでは14.6～14.8mの範囲に収まり、部分によって10cm前後の差が認められるものの、ほぼ均一な高さであるといえる。第7図には、三地点で確認された溝の全体図をのせたが、これでみると溝は4丁目地点で南ないし南東方向から入り、大きく西側にカーブして今次地点の溝につながり、今次地点で東北東から西南西方向に向った後、5丁目地点の調査区の東側ではほぼ東西方向に向き、途中で南北方向に大きく曲がり、5丁目地点の調査区に入って南進している。

溝に係わる堆積層については、第2章第2節でまとめて述べているが、今次調査時の層名と4丁目地点の報告書の層名とを対照すると、I・II層がAc層、V d・e層がBa層、V g層がCa層、VI a層がD層、VII層がEc層(?)、VIII a・b層がEa層、IX層がEb層、X層がFa・b層、XI a・b層がGb層、XII層がHb層、XIII層がIb層、XIV層がJ層、XV・XVI層がKb層、XVII層がL層、XVIII a層がMb層である。溝が掘られた時期については、溝内覆土上部から擦文晚期の土器片(第9図14)が出土し、また溝が埋積された直後に1739(元文4)年に降下したTa-aの火山灰が堆積しているところから13世紀代前後から江戸時代前半期頃までの所産と考えられる。ところで、本溝については鉄砲水のような急激な水流によって泥状をなす堆積層が侵食されできた可能性も考えられるが、溝幅が狭い割りには壁はきつく立上がり、底面も幅広く平坦な部分も多いことや、かなり長い距離にわたって存在するにもかかわらず溝の上幅に大きな変化が認められないことからみて、人為的に排水等を目的として掘られた可能性の方が大きいと考えられる。

なお、4丁目地点の調査において溝の縁および周辺から縦に打ち込まれた丸太を断ち割った材が23本整然と並んでみつかっているが、同様の例が今次調査地点の溝の西側部分などでも確認されてい



第8図 K135遺跡西5丁目通地点杭遺構実測図

る(第3図)。西側部分では、断ち割った材を溝の両縁に沿ってほぼ等間隔で打ち込んだもので、その時期は4丁目地点の例からみて溝使用時点のものと考えられる。

第3節 杭遺構（第3、8図、第2表、図版9a～10b）

杭遺構は、A-2区の北側のIII期後半期の面からみつかったもので、凹みの両側にやや太い丸太材が各3本対峙して打ち込まれていた(第2表)。北北西からみつかったのはW15、17、18の3本で、その間隔は63と73cm、南南西のものはW21、20、19の3本で、杭の間隔はともに65cmである。これらの丸太材の径は、W17が5.5cmと細いが他は8~9cmのもので、長さは上端部がいずれも欠失しているが平均で130cm以上あったと推測される。また、打ち込んだ方の下端部が残っているW15、18~20では、そ

の先端は鉈で尖がらせている。これらの各杭列の外側は、G-H、I-J セクションに示したように壁はほぼ垂直に切り込まれ、また底面もV～VII層の一部を削ってほぼ平らにし、人為的な手が加えられている。その上場の幅は2.5～2.7mで、長さは東北東側に下水管が埋設されているため不明であるが、現存部分では最大長2.8mある。杭列がある以外の地域は、A-B セクションでみられるように本期の面はなだらかな傾斜をもった浅い凹み状で、これが本来の溝の形状であったと考えられる。なお、北北西側の壁から杭周辺にかけての底面付近から W1～14、16の材(第2表)がまとまって検出されている。W1は、長さ35cm、径8.5cmの丸太材の長軸両小口を鋸で切ったもの、2、3、6～9、13は板状の断ち割材で、2、3は風化し加工痕は不明であるが、他は小口を鋸切りした端切れ状の材である。この内、6は長軸一端が鉈状の工具で薄く仕上げられ、楔状に再加工されている。4、12、16は、厚手の角材状の断ち割材の端切れで、小口は鋸切りされている。14は、丸太材を鋸で半截したもので、小口も鋸切りである。なお、4、9、12はいずれも短軸側の小口が斜めに鋸切りされたものである。また、5、11は丸太材の破片で風化し加工痕は不明、10は板材の焼けた小片である。以上の材の加工痕からみて、当時は鋸引きで製材されたものは少ないが、加工にはすでに鋸や鉈が一般的に利用されていたことがわかる。

以上の事実から、この杭列の遺構は、III期後半期の段階で、浅い凹み状の沢跡に架けられた小規模の橋の橋杭の可能性が強いと考えられる。そして、杭の周辺から出土した板材や角材などの端切れ材は、橋を作った時に捨てられたものかと推測される。その時期は、堆積層でみると江戸時代中頃に降下したTa-aの火山灰がある程度埋積した江戸時代後半期以降であり、また本層面直下のV a層から明治期前後に流布した焼酎徳利の破片(第9図17)が出土していることから、明治期頃と推定される。

ちなみに、杭列は現在の道路のほぼ中央付近からみつかったものであるが、私見の範囲では本地点の道路についての最も古い記録としては、明治8年の地図があり、現在の北5条から北7条付近まで11間(約20m)幅の道路が描かれている(札幌市教育委員会編1978)。

〔引用文献〕

札幌市教育委員会編 1978 『札幌歴史地図〈明治編〉』 さっぽろ文庫・別冊

第1表 K135遺跡西5丁目通地点炭層一覧表

遺構名	区名	層位	平面形	規 模 (cm)		標 高 (m)		厚さ (cm)	備 考
				長軸	短軸	高	低		
炭層A	A-2	XIXc' 上	不整形	(62)	(13)	15,108	15,089	1	
炭層B	A-2	XIXc' 上	"	(77)	(32)	14,996	14,865	1	
炭層C	A-2	XIXc' 中	"	(80)	(43)	14,889	14,796	1	
炭層D	A-2	XIXc' 中	橢円形	48	29	14,989	14,898	2	
炭層E	A-2	XIXc' 上	不整形	(61)	(56)	—	—	—	
炭層F	A-2	XIXc' 下	卵形	75	60	14,872	14,758	1	
炭層G	B-3	XIXc' 下	"	30	20	14,737	14,654	1	

(註) : 規模欄の () 値は欠損していることを示している。

第2表 K135遺跡西5丁目通地点出土杭一覧表(A-2区)

番号	規 格 (cm)			備 考
	長 さ	幅	厚 さ	
W15	122<	8	7.5	丸太材。先端鉈で尖らせている。
W17	—	5.5	5.5	丸太材。下部未採取。
W18	150<(推定)	9.5	7.5	丸太材。先端鉈で尖らせている。
W19	140<	9	9	丸太材。先端鉈で尖らせている。
W20	110<	8.5	8.3	丸太材。先端鉈で尖らせている。
W21	—	9	—	丸太材。未採取。
W 1	35	8.5	8.5	丸太材。長軸の両小口鋸切。
W 2	19.5	4.5	2.5	板割材的。風化。
W 3	35	5	3	板割材的。風化。
W 4	7.5	4.2	4	角割材。短軸の両小口斜めに鋸切(?)。風化。
W 5	19	8	4	丸太材。断面偏平。破片。風化。
W 6	20	3	1.5	板割材。一端が薄く楔状。長軸の両小口鋸切。
W 7	5.5	3	2	板割材。四方の小口はすべて鋸切。
W 8	5.5	3	1.5	板割材。四方の小口はすべて鋸切。
W 9	10.5	4	2	板割材。両短軸の小口斜めに鋸切。
W10	5.5	4	1.5	焼けた板材。
W11	4	3	2	丸太材。破片。風化。
W12	10.5	4.2	4.2	角割材。両短軸の小口斜めに鋸切。
W13	25	3.5	0.7	板割材。長軸一端の小口鋸切。風化。
W14	8.5	5.5	3.5	丸太材。鋸で半截。短軸の小口鋸切。
W16	22<	11	5.5	角割材。一部未採取。長軸の一端の小口鋸切。

第4章 遺物

本地点からは、遺物として土器99片、剝片石器2点、礫石器4点、礫21点(内8点は自然堆積した可能性のある小型の礫)の総数126点がみつかっている。出土層位は、A層群のV a、IX、X I b、XIV、XVI、XVII、XVIII a、XVIII c、XIX c層、B-1層群の5c、7層、B-2層群の10層、B-3層群の3a、7a、8a層、C-1層群のe1層、C-2層群のc2、d層、E層群のC層である。この中で比較的遺物検出量が多い層は、A層群のXVIII a・c、XIX c層で、炭層の検出層位とほぼ一致している。なお、C-1層群のe1層、E層群のC層検出の資料は砂礫層上部から摩滅した土器片などがみつかったもので、二次堆積した資料と考えられる(図版11a~14b)。

第1節 土器 (第9、10図、第3表、図版15a、b)

土器の出土層位は、上述した層の内のV a、IX、XIV、XVII、XVIII a、XVIII c層(A層群)、5c、7層(B-1層群)、10層(B-2層群)、3a層(B-3層群)、e1層(C-1層群)、C層(E層群)の各層である。これらの資料は、第9、10図にほとんどの資料を図示した(第3表)。

本地点の土器群は以下の5群に分類できる。

1群 (第9図3)

3は、B-2区のP1とP3が接合したもので、出土層位は3a層(B-3層群)である。文様は、破片内では無文地の上に先端が丸味を帯びた工具によって強く押し引いた幅広の沈線文が複数条単位で横および弧状に展開し、破片左の沈線文の空白部分には狭長な刺突文列が施されている。器厚は7~9mmと厚く表裏面には所々煤が付着している。本資料は、施工工具および文様構成は若干特異であるが大きく「後北C₁式」、前回の4丁目地点の分類(上野1987)でいうVI群の範疇に入るかと考えられる。

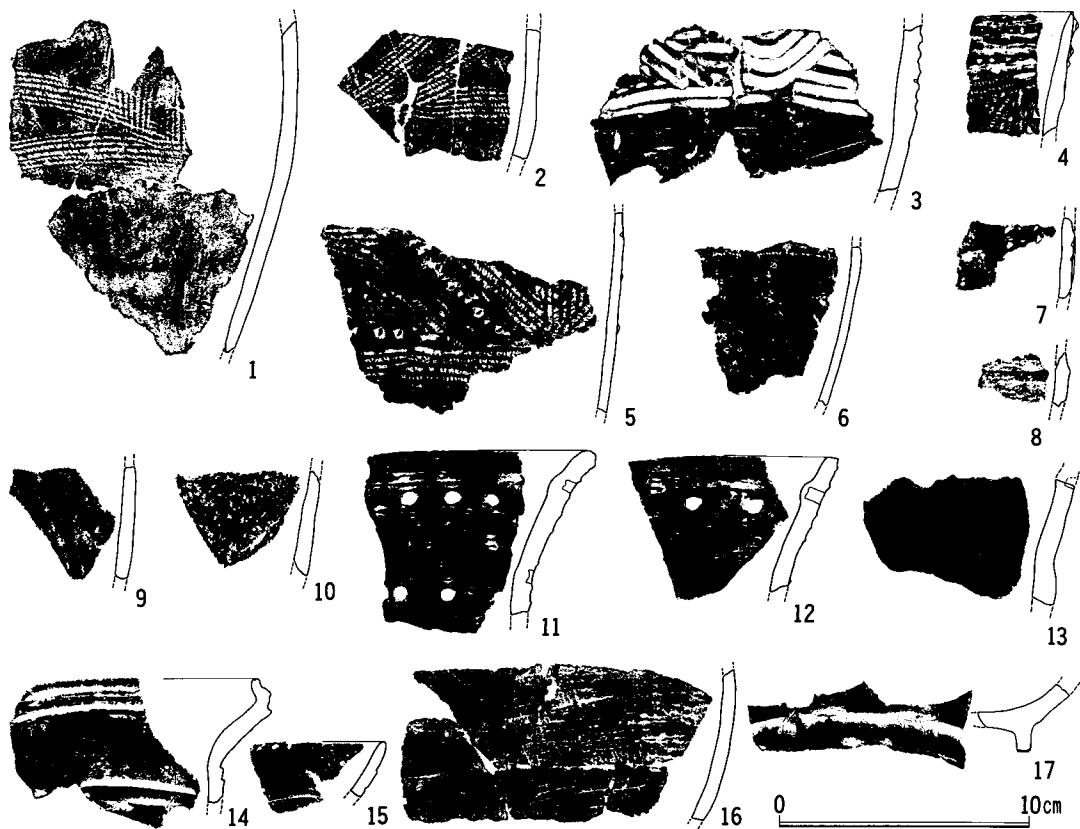
2群 (第9図1、2、4~10)

本群は、B-1区e1層(C-1層群)、C-1区7層(B-1層群)、A-2区C層(E層群)、B-3区10層(B-2層群)、C-3区10層(B-2層群)などから散発的にみつかったものである。1、2は同一個体で、表裏面とも明赤褐色を呈する焼成が良好な土器である。文様は、RLの細かい原体による帶縄文が縦横と斜めに展開し、文様帶の下部は破片内では無文である。4、5、7は、帶縄文、微隆起線文、三角形刺突文からなる文様がある例で、4の口唇部直下には2本の貼付文がある。また、6には帶縄文の一部、8には帶縄文と微隆起線文がある。B-1区からみつかった9、10は非常に摩滅した資料で、9でかすかに縄文がみえる程度であるが、焼成から判断して本群に入れた。

以上の資料は、前回のVII群、「後北C₂-D式」に相当するものである。なお、1、2については前回の4丁目地点の調査でVII c層から大量にみつかった弥生式土器の影響をうけている可能性もある。

3群 (第9図11~13)

本群は、A-2区北東XVII層(A層群)、B-2区南東XVIII c層(A層群)、B-3区南西XVIII a層(A層群)からみつかったもので、器厚が7~8mmと厚く、口唇部直下に円形の刺突文が巡るのを特徴とする。



第9図 K135遺跡西5丁目通地点発掘区出土土器拓影図

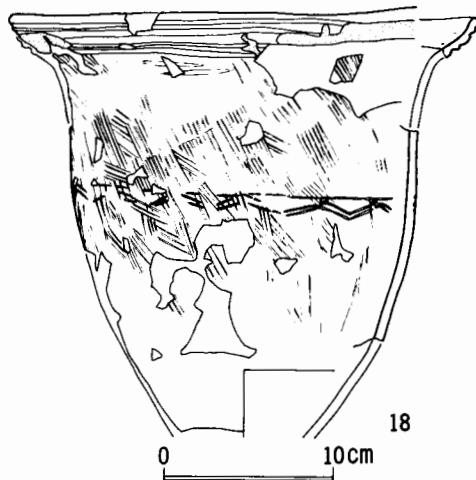
さらに、11、12には低い微隆起線文が2、3本単位で横に施され、11では破片下部にも円形刺突文列がある。これらの資料は、いずれも縄文が欠如するところから前回のVIII群、擦文早期の「北大III式」(斎藤1967)に相当する。

4群 (第9図14~16、第10図18)

4群は、早期以外の擦文式土器を一括したもので、A-2区北側の溝周辺のA層群中から出土している。

14は、溝の覆土であるIX層上部から出土した口縁部片で、破片下部の段状の沈線文部分から強く外彎した後、口唇部直下からかなり強く内屈(反)し、この部分にも段状の沈線文が2条横環している。口唇部上は凹線状で、内面整形には一部ミガキが施されている。15、16はXVIIIc層からみつかったものである。15は壊の破片で、破片下部に浅く細い沈線文、口唇部と沈線文の間には浅い段が巡る。内面整形はミガキ。16は、大型の資料の胴部の破片で全体に丸味があり壺の可能性もある。整形は、表面はハケメとミガキ、内面はミガキである。以上の破片の色調は、表裏面ともにぶい褐色を呈しており、黒色処理はない。

第10図18は、XIV層からまとまって出土したP6と9が接合したもので、底部を欠く2/3程の半完形



第10図 K 135遺跡西5丁目通地点発掘区出土土器実測図

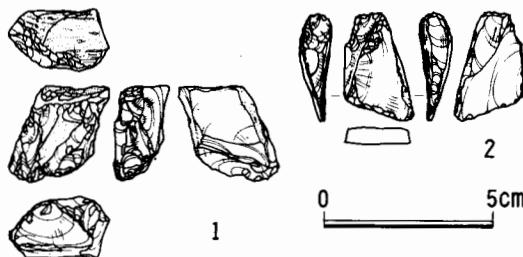
白色、内面は内黒処理が施され黒褐色を呈している。整形は、表面はハケメ、内面はミガキである。

以上の擦文式土器については、15、16は特徴が明確ではなく類例や細かな時期を特定することはできないが、14は口縁の外彎部の上下に沈線文が展開し、口唇部直下が内屈する例で、18も口縁の外彎部に段状的な沈線文が存在することから14と同タイプの可能性が強いものである。18については、横走と鋸歯状の細い沈線文が胴中央付近に展開することだけみると前回の4丁目地点のVII群(北大III式)の完形土器(上野1987:第63図45、46)に類例を求める事もできるが、しかし口唇部に向かって全体に開き気味に立上がる器形や口径や高さの割りに底径が小さい可能性が強いこと、また鋸歯状文が擦文式土器の基本的な文様要素として各時期に存在することから、14例を含めて松前町札前遺跡(松前町教委1985)や奥尻島青苗遺跡(佐藤編1981)などの道南部の擦文晚期の資料に対比するのが妥当かと考えられる。

5群(第9図17)

17は、A-2区のV a層(A層群)から出土したもので、明治期を中心に新潟県から移入された焼酎徳利(松下ほか1978)の底部位破片と考えられる。

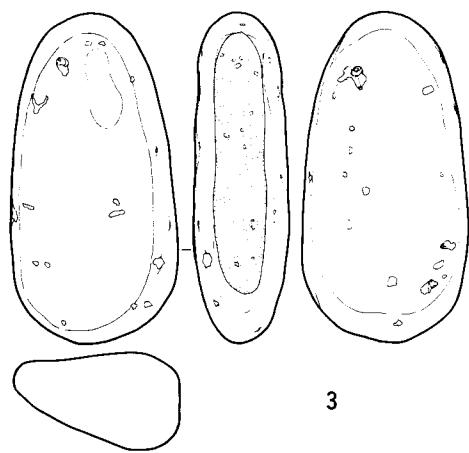
第2節 石 器 (第11、12図、第4表、図版16a)



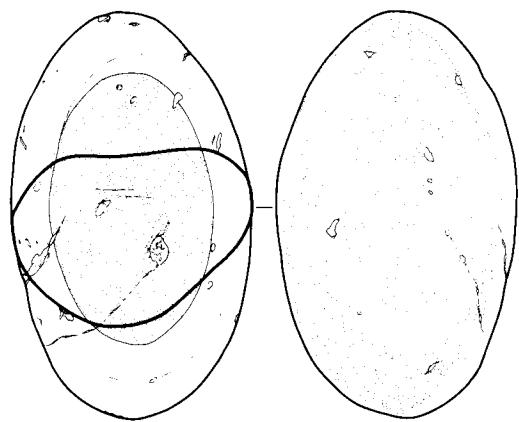
第11図 K 135遺跡西5丁目通地点発掘区出土石器実測図(1)

土器である。胴中央付近から底部にかけてはすばまり傾向で底径は小さいものと考えられる。胴上部は心持ち開き気味に立上がり、口唇部付近にきて大きく外彎した後、途中からやや内彎気味に立上がる。口径は28.4cmで、現存高は25.6cmを計る。口唇部は丸味を帯び、外彎部分には4本のやや深めの横走沈線文が巡り、全体として段状に近い展開を示している。胴中央部には、細く浅い沈線文が1条横環し、その下に同種工具による振幅の広い鋸歯状の2本単位の沈線文が施されているが、これらの沈線文はその後の整形で所々消されている。胎土中には細かな砂粒を含むが、焼成は堅緻である。色調は、表面は灰

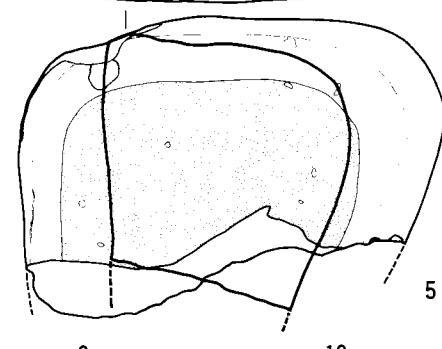
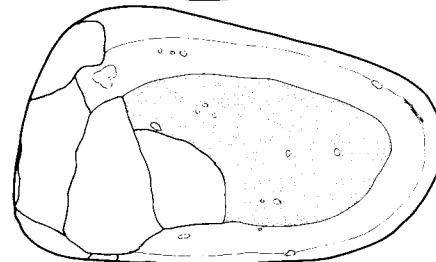
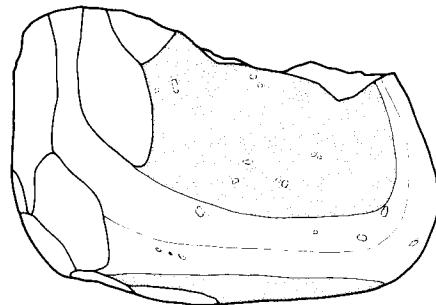
石器および剝片・礫の出土層位は、A層群のIX、X I b、XVI、VIII a、VIII c、IX c層、B-3層群の3a、7a、8a層、C-2層群のc2、d層、E層群のC層の各層である。石器は、A、B-2、B-3区にかけての溝の周辺からいざれもみつかったもので、特に礫石器はA-2区北部からB-2区南部の狭い範



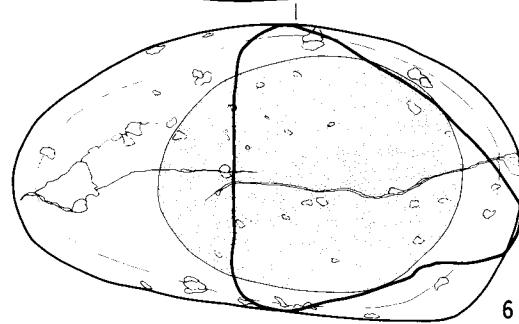
3



4



0 10 cm



6

第12図 K 135遺跡西5丁目通地点発掘区出土石器実測図(2)

囲から出土している。

剥片石核および使用痕のある剥片（第11図1、2）

1、2は、黒耀石製の剥片石器である。

1は、B-3区のXIX c層（A層群）から出土した剥片石核と考えられるもので、裏面図にみられる一次剥離面（positive）から判断されるように、原石面を有する厚手の剥片を素材にして、表面図右側の狭長な剥離、下面図にみられるやや幅広の寸の短い剥離は剥片生産した痕の可能性がある。側面図に示した面のうち右側の2枚は切断面状の剥離である。なお、正面図の下部の左側には細かな剥離が集中しており、最終的に搔器的に利用されたことも考えられる。

2は、A-2区の5c層（B-1層群）からみつかった使用痕のある剥片で、左右に切断ないし欠損面があるやや厚手の剥片を素材に、裏面図側にみられる器厚を減じるような狭長な剥離と正面図下縁に不規則で小さな剥離が並んだものである。全体にローリングをうけ、特に角は著しく磨耗している。

擦 石（第12図3～6）

4点の礫石器の出土区と層位は、3がB-2区XVIII a層（A層群）、4が同区3a層（B-3層群）、5はA-2区7a層（B-3層群）、6は同区XIX c層（A層群）である。

3は、平面形が橢円形で、断面がやや扁平な三角形を呈する礫を素材にし、その幅広側の側縁に平滑な擦面があるものである。4は、厚手の円礫の平坦な面が擦面で、滑らかな心持ち凹んでおり、丸味のある裏面側は手擦れ状の軽い磨耗痕が認められる。なお、加焼による黒班が所々にある。5は、破損しているが厚手のやや大型の四角形の礫を素材にし、表裏面と側面に擦面があるもので、正面図部分の擦面は面体にそって若干凹んでいる。随所に加焼による火バネと黒班がある。6は、厚手の断面三角形の円礫を利用し、その二面に平坦ないしやや膨らみのある滑らかな擦面があるものである。加熱され、随所に黒班が認められる。

〔引用文献〕

- 上野秀一 1987 「4丁目地点」『K135遺跡4、5丁目地点』札幌市文化財調査報告書XX X
- 斎藤 傑 1967 「擦文文化初頭の問題」『古代文化』19-5
- 佐藤忠雄編 1981 『奥尻島青苗遺跡』
- 千歳市教育委員会 1978 「祝梅三角山D遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書III
- 松下 亘・氏家 等・笛木義友 1978 「焼酎徳利について—明治期における新潟と北海道との関連資料」『北海道開拓記念館研究年報』6
- 松前町教育委員会 1985 『札前』

第3表 K135遺跡西5丁目通地点土器一覧表

挿図番号	出土区	層位	番号	型式名	分類	部位	器厚 (mm)	備考
9-1	C-1	7 (B-1)	P 1	後北C ₂ -D式	2	口縁部	6	2と同一個体
2	C-1	7 (B-1)	P 1	"	2	口縁部	6	
3	B-2	3a (B-3)	P 1,3	後北C ₁ 式	1	口縁部	7	
4	C-3	10 (B-2)	P 2	後北C ₂ -D式	2	口縁部	5	
5	C-3	10 (B-2)	P 1	"	2	口縁部	4	
6	B-3	10 (B-2)	P 1	"	2	胴部	4	
7	B-1	e 1 (C-1)	P 1	"	2	口縁部	5	
8	A-2	c (E)	P 5	"	2	口縁部	5	
9	B-1	e 1 (C-1)	P 2	"	2	胴部	5	風化
10	B-1	e 1 (C-1)	P 3	"	2	胴部	6	風化
11	B-2	XVIII c (A)	P 2	擦文式(早期)	3	口縁部	7	北大III式
12	B-3	XVIII a (A)	P 2	"	3	口縁部	7	"
13	A-2	XVII (A)	P 4	"	3	口縁部	8	"
14	A-2	IX (A)	P 3	擦文式(晚期)	4	口縁部	7	溝内二次堆積
15	A-2	XVIII c (A)	P 7	擦文式	4	口縁部	4	杯
16	A-2	XVIII c (A)	P 8	"	4	胴部	5	壺(?)
17	A-2	V a (A)	P 1	焼酎徳利	5	底部	6	明治期
10-18	A-2	XIV (A)	P 6,9	擦文式(晚期)	4		5	完形

註1：層位欄の下の()表示は、層群名である。

第4表 K135遺跡西5丁目通地点石器一覧表

挿図 番号	出土区	層位	番号	器種名	規格(cm)			重量 (g)	石質
					長さ	幅	厚さ		
1	B-3	XIXc (A)	S 5	剥片石核	2.9	3.0	1.7	14.2	Obs.
2	A-2	(B-1) 5c	S 7	使用痕のある剥片	3.3	2.1	0.5	4.8	Obs.
3	B-2	XVIIIa (A)	S 6	擦石	13.3	6.7	3.9	480	And.
4	B-2	(B-3) 3a	S 3	"	16.3	9.6	7.2	1,650	And.
5	A-2	(B-3) 7a	S 8	"	(17.0)	(12.0)	(9.9)	(2,750)	And.
6	A-2	XIXc (A)	S 2	"	20.4	11.9	11.6	3,900	And.

註1：層位の欄の()表示は層群名である。

2：規格の欄の()値は欠損を示している。

3：石質略号記号は、And. (Andesite)：安山岩，Obs. (Obsidian)：黒耀石

結語

今次地点の調査は、JR北海道函館本線高架化工事に関連したK135遺跡の調査としては3次目である。

K135遺跡の中には、前回と今回の調査を通じて、河川が存在することが明らかになったが、その変遷過程については第2章第3節で詳述したとおりである。I、II期は、縄繩文時代初頭頃の時期で、この内I期の堆積層は細～粗粒砂と砂礫からなり、E、C層群が堆積した後の面で、川の上幅は7～12mである。II期は、シルトと細粒砂層からなり、その前半期(II E期)の川の上幅は10～13m、後半期(II L期)は6～9mである。III期は、堆積層はシルト層で、この当時川は枯川か静水域での堆積が始まり、かっての川は浅い凹み程度になっていたものである。前半期(III E期)は、A層群のX層上面の時期で、溝が掘られた面に相当し、凹みの上幅は約5mある。後半期(III L期)は、V層上面の時期で、橋杭が打ち込まれており、凹みの上幅は約3mである。

遺構としては、炭層が6箇所みつかっているが、検出層位はA層群のXIX c'層で、その年代は擦文期頃と考えられる。溝状遺構は、III期前半期に人为的に排水等を目的として掘られたもので、中・近世の所産である。杭遺構は、III期後半期の浅い凹み状の川跡に架けられた小規模の橋の橋杭跡で、時期は明治期である。

遺物の中の土器については、型式が明確にできたものは後北C₁、C₂-D式、擦文早期(北大III式)、擦文晚期などがあり、出土層位は後北C₁、C₂-D式はB-1～3、C-1層群内とE層群上面、擦文早期はA層群のXVII、XVIII a・c層、擦文晚期はA層群のIX、XIV層で、型式が特定できない擦文式はXVIII c層出土である。なお、明治期の焼酎徳利はA層群のV a層からみつかっている。

この中で擦文晚期とした土器(第9図14、第10図18)については、道央部ではかつてはこの段階の資料がほとんどなく、擦文文化の中心は道東に移るといわれてきた。しかし、道東で一般的な刺突文列を伴った鋸歯状文がある擦文晚期の資料も、札幌市K36遺跡(上野・羽賀1987:第9図2ほか)や14と類似した文様・器形の甕形の完形土器が出土している恵庭市公園遺跡(大場・石川1966:第11図16)などからも出土しており、この時期の資料が道央部に存在することは明確になってきた。なお、札前遺跡や青苗遺跡など道南部の本時期の良好なセット資料を検討すると、道南部では甕に鋸歯状文や刺突文列が施されたものは少なく、横走沈線文だけの例が多いことから、従来口縁部の文様帶に横走沈線文があることのみをもって擦文前期段階に比定されていた道央部の資料の中には同晚期の資料も含まれている可能性もあり、今後これらの資料について再検討する必要性がでてきたように思われる。

[引用文献]

上野秀一・羽賀憲二 1987 『K36遺跡』札幌市文化財調査報告書XXIII

大場利夫・石川徹 1966 『恵庭遺跡』

図 版

縮 尺	図版15 a	1/3
	15 b	1/3
	16 a	1/2(剥片石器) 1/3(礫石器)



a 発掘区全景(1)(IE期:北より)



b 発掘区全景(2)(IE期A~C-1、2区:北より)



a 発掘区全景(3)(II L 期 A、B-1、2区: 西より)



b 発掘区全景(4)(I E 期 A、B-1、2区: 西より)



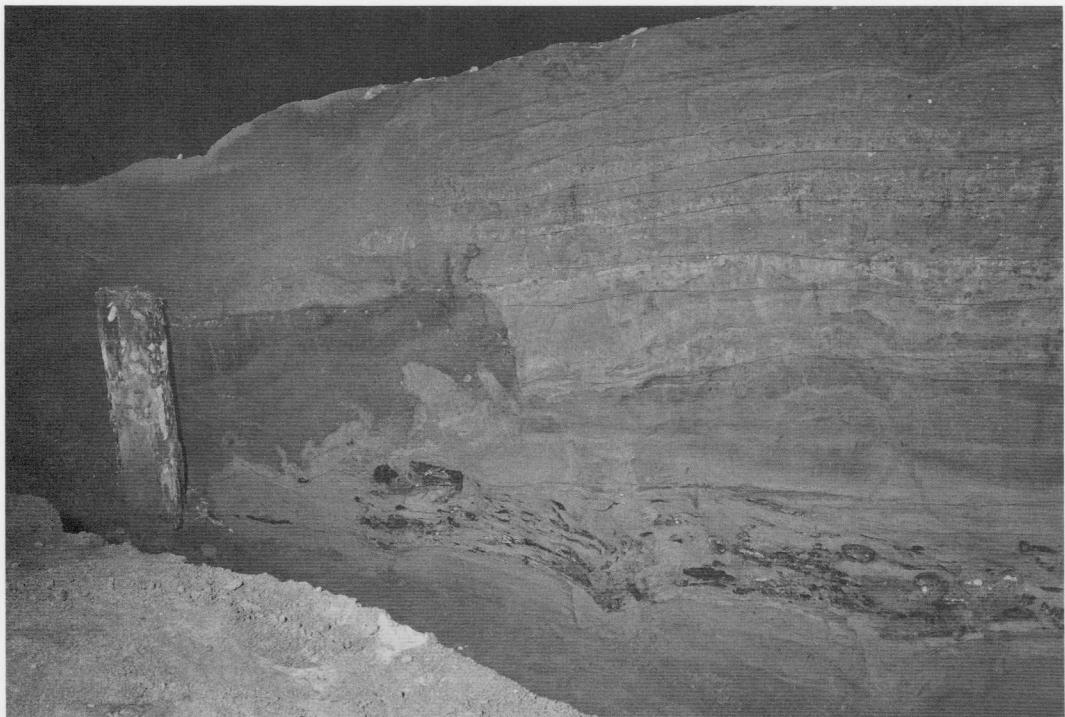
a 発掘区全景(5)(発掘着手面、A～C-2、3区：北より)



b 発掘区セクション(1)(A-Bセクション、B-1区、西より)



a 発掘区セクション(2)(B-1、2区、北より)



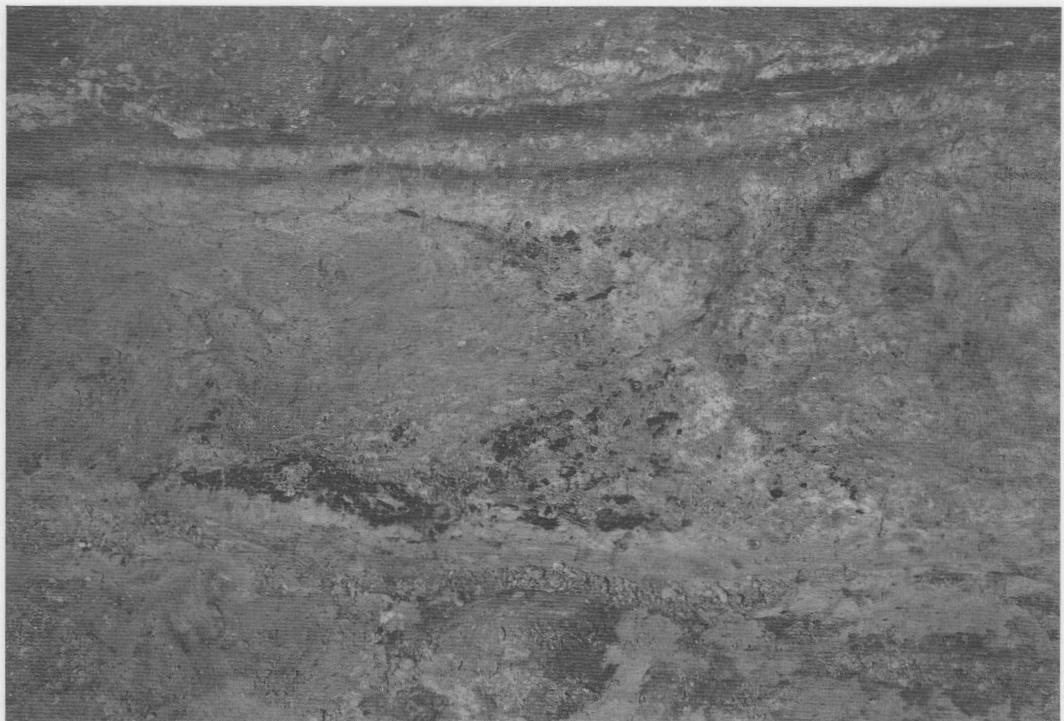
b 発掘区セクション(3)(C-Dセクション、C-2区、南西より)



a 炭層A (A-2区IX c'層上部、西より)



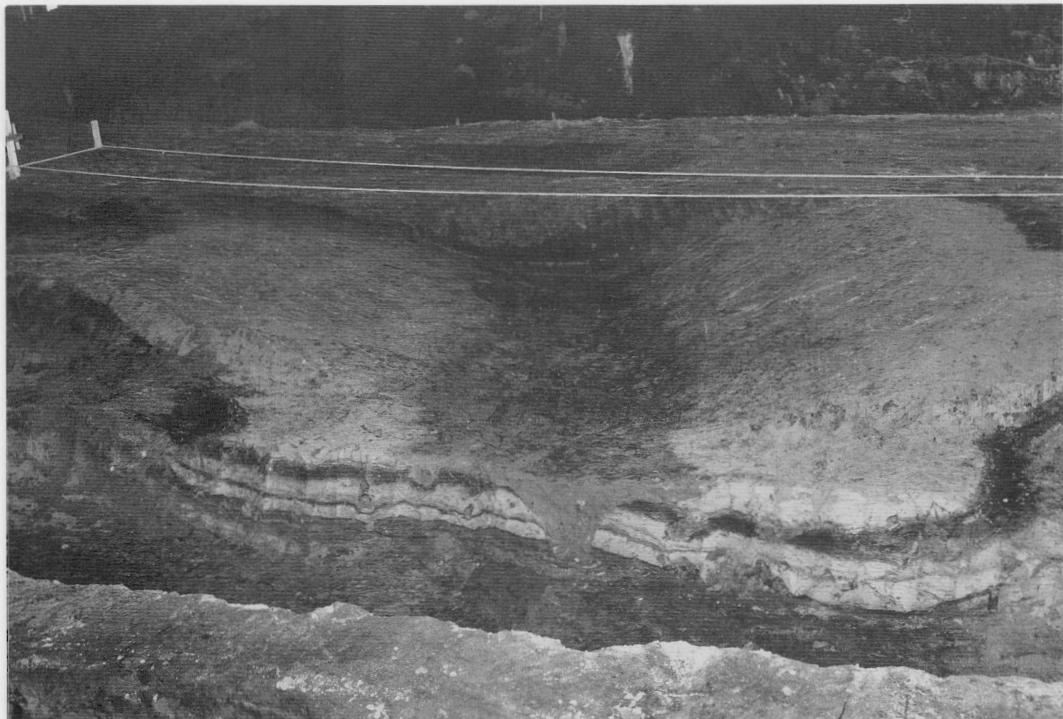
b 炭層D (A-2区IX c'層中部、西より)



a 炭層C (A-2区 XIX c'層中部、西より)



b 溝関係セクション (A-1区、E-Fセクション、東より)



a 溝近景(1)(A-1、2区、発掘前、西より)



b 溝近景(2)(A-1、2区、発掘後、西より)



a 溝近景(3)(B-2、3区、西より)



b 溝近景(4)(A-1区、東より)



a 杭遺構近景(1) (A-2区、西より)



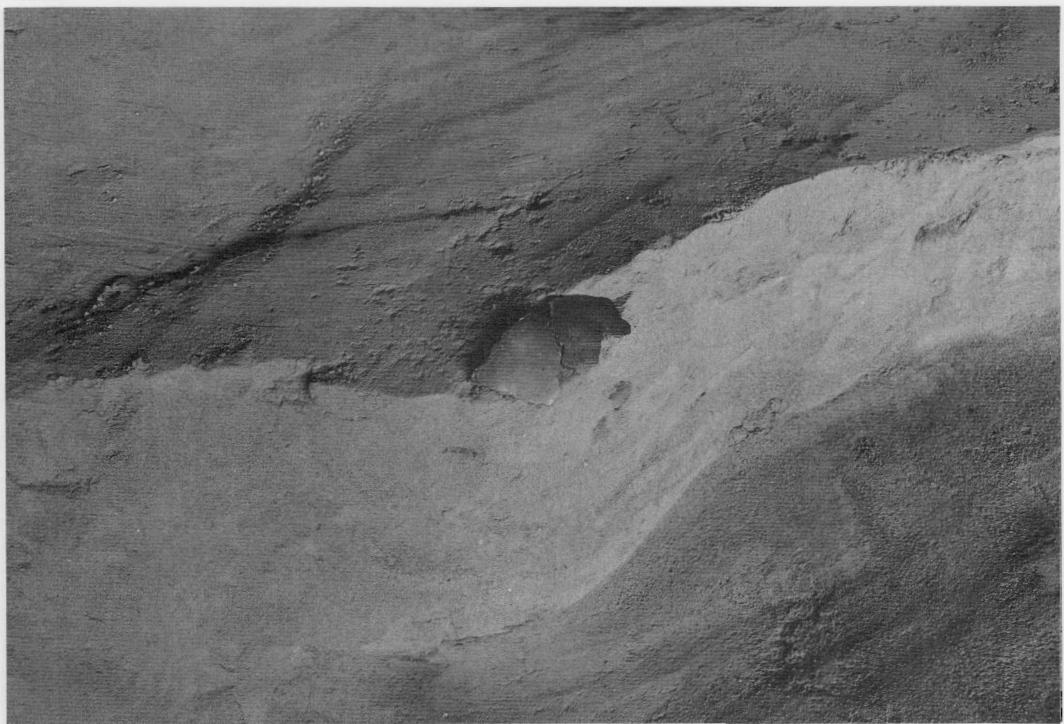
b 杭遺構近景(2) (A-2区、溝発掘後、西より)



a 杭列(1) (北側、南西より)



b 杭列(2) (南側、西より)



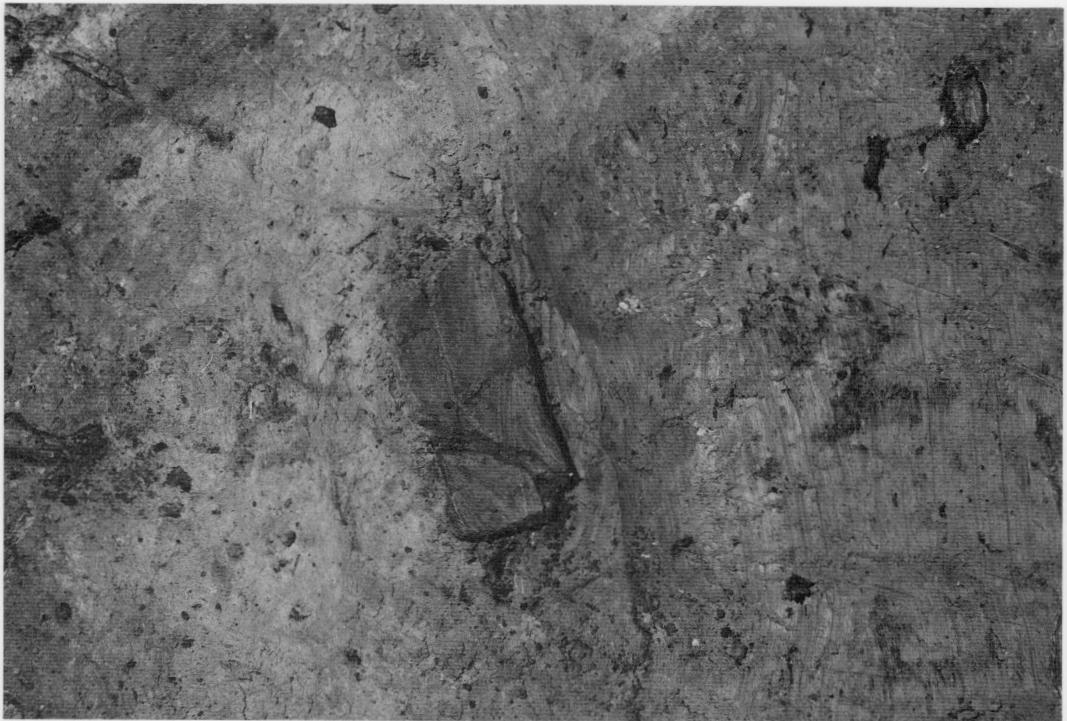
a 遺物出土状況(1)(C-1区、B-1層群7層、P1、北より)



b 遺物出土状況(2)(B-2区、A層群XVIIIc層、S4、5、P2、西より)



a 遺物出土状況(3)(A-2区、A層群XVIIIc層、P7、8、東より)



b 遺物出土状況(4)(A-2区、A層群XVIIIc層、P8、真上より)



a 遺物出土状況(5)(A-2区、A層群XIV層、P6、9、南西より)



b 遺物出土状況(6)(A-2区、A層群XIV層、P9、南西より)

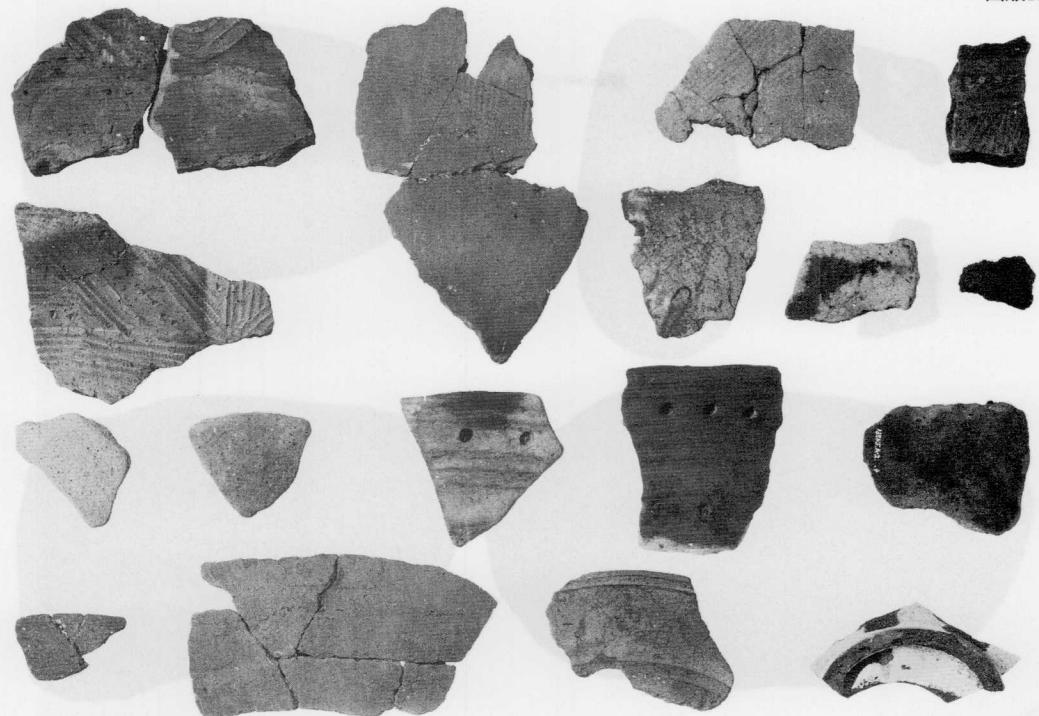


a 遺物出土状況(7)(A-2区、A層群IX層、P3、東より)



b 遺物出土状況(8)(A-2区、A層群V a層、P1、東より)

図版15



a 発掘区出土土器(1)



b 発掘区出土土器(2)

図版16



a 発掘区出土石器



b 発掘調査風景(1)



a 発掘調査風景(2)



b 発掘調査風景(3)

札幌市文化財調査報告書 XXXIX

K 1 3 5 遺跡

西5丁目通地点

平成2年3月20日印刷

平成2年3月31日発行

発行者 札幌市教育委員会
札幌市中央区南1条西14丁目

印刷所 中西印刷株式会社
札幌市東区東雁来3条1丁目1-34